

宮沢賢治から高橋秀松への書簡

『宮沢賢治全集』第15巻(筑摩書房)に収められている大正4、5、6年の書簡は、盛岡高等農林時代の3年間にわたるもので、その頃に東京にいた妹トシ宛ての他は、ほとんどが高橋秀松と保坂嘉内の2人の親友にあてたものです。『全集』には、13通が収録されていますが、以下はその中の4通です。休暇中の近況報告が主な内容で、青春時代の賢治と秀松の濃密な交流をうかがわせる貴重な資料といえます。

大正四年八月二十九日 高松秀松あて 葉書

宮城県増田町 高橋秀松様
八月廿九日 違野ニテ 宮沢賢治
今朝から十二里歩きました 鉄道工事で新しい岩石が沢山出てみます 私が一つの岩石をカチッと割りますと初めこの連中が瓦斯だった時分に見た空間が紺碧に変わって光ってゐる事に愕いて叫ぶこともできずきらきらと輝いてゐる黒雲母を見ます 今夜はもう秋です スコウピオ*も北斗七星も願はしい静な脈を打つてゐます

<備考>*スコウピオ-----さそり座。

大正四年十二月二十七日 高松秀松あて 葉書

宮城県名取郡増田町 高橋秀松様
頓首再拝
「これは又愕ろいた牧師の命令で。」
如何にも君の云ふ通り私の霊はたしかに遙々宮城県の小さな教会までも旅行して行ける位この暗い店さきにふらふらとして居ります。忘れて居りましたが先日は停車場迄何ともありがたう。「優しき兄弟に幸あらんことを アーメン」

<備考>日付は消印による。

大正五年四月四日 高松秀松あて 葉書

宮城県名取郡増田町 高橋秀松様
四月四日 岩手 宮沢賢治拝
旅行中はいろいろ御世話になりまして何とも有り難うございます。この旅行の終りの頃のたよりなき淋しさと云ったら仕方ありませんでした。富士川を越えるときも又黎明の阿武隈の高原にもどんなに一心に観音を念じてもすこしの心のゆるみより得られませんでした。聖道門の修業者には私は余り弱いのです。東京のそらも白く仙台のそらも白くなつかしいアンモン介や月長石やの中にあつたし胸は踊らず旅労れに鋭くなった神経には何を見てもはたはたとゆらめいて涙ぐまれました。こんなとき丁度汽車があなたの増田町を通るとき島津大等先生がひょっとうしろの客車から歩いて来られました。仙台の停車場で私は三時間半分睡り又半分泣いてみました。宅へ帰ってやうやく雪のひかりに平常になったやうです。昨日大等さんところへ行つて来ました

大正六年八月十五日 高松秀松あて 葉書

盛岡市仁王小路 小笠原敬三様方 高橋秀松様
八月十五日 花巻川口町 宮沢賢治
伊旅行中*は度々御便りを戴きまして誠に有り難う存じます 御无事で御帰りになり先づは御めでたうございます。只今は農場の実習で随分御勞れでせう。私の方も御蔭でまめしくて居ります 先月の末四五日の間東海岸を見て参りました。

あなたの方にも沢山面白い話があるでせうが孰れゆつくりうかがひませう。級のみなさんも揃つて御出でですか。これで失礼致します。末筆ながら先生へどうかよろしく御伝へを願ひます。さよなら。

<備考>*御旅行中-----盛岡高等農林学校一・二部三年生の北海道方面見学旅行(賢治は不参加)。